

千葉県八千代市

市内遺跡発掘調査報告書

真木野向山遺跡 a 地点
川崎山遺跡 h 地点
浅間内遺跡
川崎山遺跡 i 地点
上谷津台南遺跡 c 地点
稻荷前遺跡 b 地点
妙正神遺跡
沖塚遺跡 b 地点
高津新田遺跡 b 地点

千葉県八千代市
市内遺跡発掘調査報告書
平成12年度

印刷日 2000年8月31日
発行日 2000年9月1日
発行 八千代市教育委員会
生涯学習部生涯学習課
〒276-0045 八千代市大和田138-2
TEL 047(483)1151
印刷 金子印刷企画

平成12年度

八千代市教育委員会

凡 例

- 本書は、八千代市教育委員会が平成11年度市内遺跡発掘調査事業として、国及び県の補助金を受けて実施した発掘調査の報告書である。
- 調査遺跡名及び所在地、期間、面積、調査原因は下記のとおりである。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	面積	調査原因
1	真木野向山遺跡 a 地点	島田台字東山久保 976-4 ほか	11.4.19 ~ 11.5.7	620 m ² / 6,112.6 m ² 本調査 110 m ²	墓地造成
2	川崎山遺跡 h 地点	萱田字中台 2292-1	11.4.23 ~ 11.4.30	319 m ² / 1,498.04 m ²	店舗建設
3	浅間内遺跡	村上字浅間内 2819-1 ほか	11.5.28 ~ 11.6.3	150 m ² / 570 m ²	土地区画整理
4	川崎山遺跡 i 地点	萱田町字川崎山 741-1 の一部	11.8.5 ~ 11.8.12	480 m ² / 2,982.31 m ²	畑地造成
5	上谷津台南遺跡 c 地点	上高野字上谷津台 1053-1, 1056, 1057	11.9.1 ~ 11.9.16	上層 936 m ² , 下層 14.4 m ² / 6,035 m ²	宅地造成
6	稲荷前遺跡 b 地点	上高野字上谷津台 1126-1 の一部	11.10.15 ~ 11.10.27	180 m ² / 1,814.59 m ² 本調査 4 m ²	共同住宅
7	妙正神遺跡	神久保字北之谷津 44 ほか	11.10.26 ~ 11.11.12	433 m ² / 4,341.08 m ²	残土埋め立て
8	沖塚遺跡 b 地点	村上字下市場台北側 2215-8 ほか	12.1.31 ~ 12.2.4	106 m ² / 748.84 m ²	宅地造成
9	高津新田遺跡 b 地点	八千代台南 2 丁目 1-2, 4-1	12.3.14 ~ 12.3.30	690 m ² / 4,336 m ²	宅地造成

- 整理作業は、平成11年度事業として平成11年12月20日から平成12年3月31日までの期間に行い、報告書印刷は平成12年度事業として平成12年4月3日から8月31日までの期間に行った。
- 本書の執筆は、宮澤久史が1を、常松成人がⅡ-1・3・6を、武藤健一がⅡ-2・8・9を、森竜哉がⅡ-4・5・7を行った。
- 調査組織については、巻末に掲載した。
- 土層説明の色調の表記法については、一部、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖 a(13版 1993.1)』を用いている。
- 出土した遺物・写真・図面等の調査資料は、八千代市教育委員会が保管している。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
真木野向山遺跡 a 地点	ピット群	縄文時代近世	ピット 20基 道路状遺構 1条	縄文土器 石器 土師器 陶器	確認本調査
川崎山遺跡 h 地点	集落跡	縄文時代弥生時代古墳時代近世以降	土坑 4基 住居跡 3軒 住居跡 2軒 溝 2条	弥生土器 弥生土器 土師器 須恵器 灰丸遺宝	確認調査
浅間内遺跡	集落跡	縄文時代古墳時代江戸時代	ピット 5基 住居跡 2軒 土坑 1基	縄文土器 土師器 須恵器 灰丸遺宝 陶器	第4次確認調査
川崎山遺跡 i 地点	集落跡	弥生時代古墳時代	なし	なし	確認調査
上谷津台南遺跡 c 地点	散布地	縄文時代	なし	縄文土器	確認調査
稲荷前遺跡 b 地点	ピット群	縄文時代	ピット 2基	黒曜石片	確認本調査
妙正神遺跡	集落跡塚群	弥生時代古墳時代中近世	住居跡 1軒 塚 4基	縄文土器 弥生土器 土師器	確認調査 神久保塚群を含む
沖塚遺跡 b 地点	散布地	縄文時代	なし	なし	確認調査
高津新田遺跡 b 地点	牧跡	江戸時代時期不明	野馬土手 1条・野馬堀 2条 溝 1条	泥面子 陶器	確認調査 高津新田野馬堀遺跡を含む

調査組織 (平成11年度未現在)

調査主体者	磯貝 謙吾 (八千代市教育委員会教育長)
事務担当者	藤城 恒昭 (八千代市教育委員会生涯学習部長) 三浦 幸子 (八千代市教育委員会生涯学習部次長) 實川 憲 (八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課長) (平成11年10月から 同部生涯学習課長) 小名木伸雄 (八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係長) (平成11年10月から 同部生涯学習課文化財保護班主査) 秋山 利光 (八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係副主査) (平成11年10月から 同部生涯学習課文化財保護班副主査) 宮澤 久史 (八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主任主事) (平成11年10月から 同部生涯学習課文化財保護班主任主事) 調査担当者 森 竜哉 (八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主任主事) (平成11年10月から 同部生涯学習課文化財保護班主任主事) 常松 成人 (八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主任主事) (平成11年10月から 同部生涯学習課文化財保護班主任主事) 武藤 健一 (八千代市教育委員会生涯学習部社会教育課文化財係主事) (平成11年10月から 同部生涯学習課文化財保護班主事)
調査補助員	阿部るみ子 植田 正子 遠藤 誠 遠藤 玲子 笠川千代子 古滝 洋子 鈴木 一代 鈴木 勉 立石ふく子 田中 洋子 玉井 胤弘 寺澤 洋子 鳥羽 良子 永島 辰夫 長田 京子 野中 則子 原田 雪子 日向 洋子 福島 正晃 見神 光恵 渡辺 登 整理補助員 事 務 員 植田 正子 長田 京子 見神 光恵 三宅由美子

本文目次

I	調査に至る経緯	2
II	各遺跡の概要	5
1.	真木野向山遺跡 a 地点	5
2.	川崎山遺跡 h 地点	11
3.	浅間内遺跡 (第 4 次確認調査)	13
4.	川崎山遺跡 i 地点	15
5.	上谷津台南遺跡 c 地点	16
6.	稲荷前遺跡 b 地点	17
7.	妙正神遺跡	19
8.	沖塚遺跡 b 地点	21
9.	高津新田遺跡 b 地点	22

挿図目次

第 1 図	市内遺跡位置図	4	第 18 図	川崎山遺跡 i 地点土層断面図	15
第 2 図	真木野向山遺跡 a 地点位置図	5	第 19 図	上谷津台南遺跡 c 地点・稲荷前遺跡 b 地点位置図	16
第 3 図	真木野向山遺跡 a 地点遺構検出状況図	6	第 20 図	上谷津台南遺跡 c 地点トレンチ配置図	17
第 4 図	真木野向山遺跡 a 地点 A2-10-3G ~ 4G 西壁土層断面, 20P 土層断面図	7	第 21 図	上谷津台南遺跡 c 地点出土遺物	17
第 5 図	真木野向山遺跡 a 地点遺構実測図 (1)	7	第 22 図	稲荷前遺跡 b 地点遺構検出状況図	17
第 6 図	真木野向山遺跡 a 地点遺構実測図 (2)	8	第 23 図	A1-33-3G 北壁土層断面図	18
第 7 図	A1-41-2G ~ 42-1G 西壁土層断面, 道路状遺構平面・エレベーション図	9	第 24 図	稲荷前遺跡 b 地点出土遺物	18
第 8 図	真木野向山遺跡 a 地点出土遺物 (1)	9	第 25 図	稲荷前遺跡 b 地点遺構実測図	18
第 9 図	真木野向山遺跡 a 地点出土遺物 (2)	10	第 26 図	妙正神遺跡位置図	19
第 10 図	川崎山遺跡 h・i 地点位置図	11	第 27 図	妙正神遺跡遺構検出状況図	20
第 11 図	川崎山遺跡 h 地点遺構検出状況図	12	第 28 図	妙正神遺跡出土遺物	20
第 12 図	川崎山遺跡 h 地点土層断面図	12	第 29 図	沖塚遺跡 b 地点位置図	21
第 13 図	浅間内遺跡位置図	13	第 30 図	沖塚遺跡 b 地点トレンチ配置図	22
第 14 図	浅間内遺跡遺構検出状況図	14	第 31 図	沖塚遺跡 b 地点土層断面図	22
第 15 図	浅間内遺跡 7T 南壁土層断面図	14	第 32 図	高津新田遺跡 b 地点位置図	22
第 16 図	浅間内遺跡出土遺物	14	第 33 図	高津新田遺跡 b 地点遺構検出状況図	24
第 17 図	川崎山遺跡 i 地点トレンチ配置図	15	第 34 図	高津新田遺跡 b 地点野馬土手トレンチ土層断面図	24

図版目次

図版 1	真木野向山遺跡 a 地点その 1
図版 2	真木野向山遺跡 a 地点その 2
図版 3	真木野向山遺跡 a 地点その 3・川崎山遺跡 h 地点
図版 4	浅間内遺跡・川崎山遺跡 i 地点
図版 5	上谷津台南遺跡 c 地点・稲荷前遺跡 b 地点
図版 6	妙正神遺跡・沖塚遺跡 b 地点
図版 7	高津新田遺跡 b 地点

I 調査に至る経緯

八千代市は、首都圏のベッドタウンとして宅地開発が進んだ地域であり、平成8年4月の東葉高速鉄道の開業以来、この性格を強めている。そうした状況の中、八千代市教育委員会（以下「市教委」と略）では千葉県教育委員会（以下「県教委」と略）の指導のもと、開発事業者からの「埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて」の照会（以下「照会」と略）に対処し、埋蔵文化財の保護に努めている。このうち確認調査が必要と判断される遺跡については、国と県の補助金を受け発掘調査を実施している。

真木野向山遺跡 a 地点 平成11年1月、宗教法人一進寺から墓地増設のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を実施したところ、現況は霊園内の荒蕪地で、縄文土器片等の散布を確認することができた。また、周知の遺跡の範囲内であり、過去の隣接地の確認調査及び本調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため、照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、4月に文化財保護法第57条の2第1項の規定による土木工事の発掘届（以下「土木工事の届」と略）が提出され、準備の整った4月19日に調査を開始した。

川崎山遺跡 h 地点 平成11年3月、寺澤鴻氏から店舗建設のため照会が提出された。これを受け市教委で現地踏査を実施したところ、現況は山林（萱田町市民の森）で、遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、周知の遺跡の範囲内であり、周辺の過去の確認調査及び本調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため、照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、4月に土木工事の届が提出され、準備の整った4月23日に調査を開始した。

浅間内遺跡 本遺跡の調査は、辺田前土地区画整理事業に伴うものである。本事業については、平成2年5月に八千代市辺田前土地区画整理組合（当時は設立準備委員会）から照会が提出され、平成3年4月に県教委によって、事業区域596,000㎡のうち98,000㎡について、遺跡有りの回答が出されている。

本遺跡については、平成6～7年度に調査を実施したが、一部に未調査区域が残っている。今回、市指定文化財（天然記念物）イヌザクラの移植を伴う新たな造成工事が発生する事になった。当該地区は、山林であり、遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、周知の遺跡の範囲内であり隣接地の本調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられ、確認調査が必要と判断した。事業者と協議を行い、4月に「土木工事の届」が提出された。事業者が伐採等を行い、準備の整った5月28日に調査を開始した。

川崎山遺跡 i 地点 平成11年8月、杉山泰一氏から畑地造成のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、周知の遺跡の範囲内であり、周辺の過去の確認調査及び本調査の実績から、遺構が検出される可能性が高いと考えられた。このため、照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、事業者から速やかに「土木工事の届」が提出され、準備の整った8月5日に調査を開始した。

上谷津台南遺跡 c 地点 平成11年7月、株式会社サンプランニングから宅地造成のため、照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は山林で、遺物散布状況を観察できる地点は無かったが周知の遺跡の範囲内であり、周辺の過去の確認調査及び確認本調査の実績から、遺構が検出される可能性があると考えられた。このため、照会地内の台地先端部から平坦部にかけての6,035㎡を遺跡有りとし、確認調査が必要と判断した。事業者にもその旨を回答し、協議を行った。その結果、事業者から

「土木工事の届」が提出され、伐採等の準備が整った9月1日に調査を開始した。

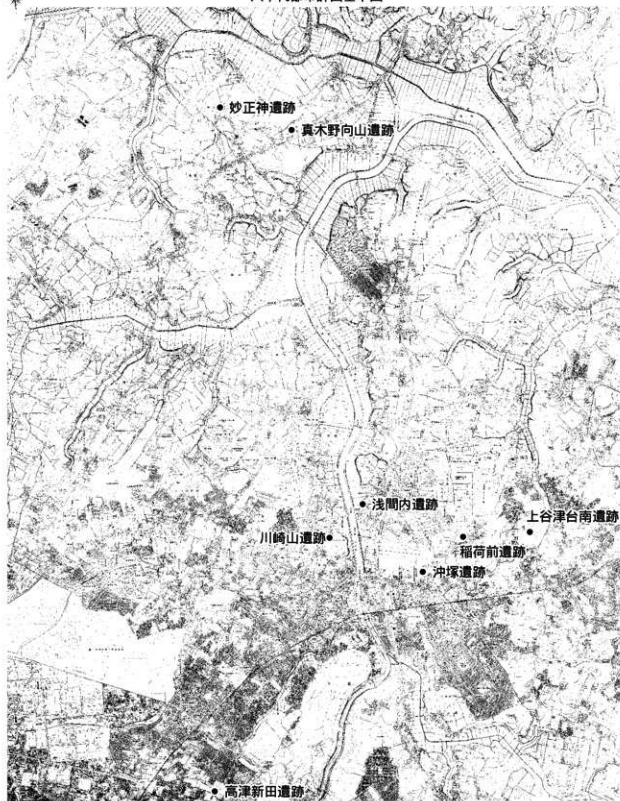
稲荷前遺跡b地点 平成11年9月、中村市子氏から共同住宅建設のため照会が提出された。これを受け、市教委で現地踏査を実施したところ、現況は荒蕪地であるが埋め立てが行われており、遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、周知の遺跡の範囲内であり、周辺の過去の確認調査及び確認本調査の実績から遺構が検出される可能性があると考えられた。このため、照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、9月に「土木工事の届」が提出され、準備の整った10月15日に調査を開始した。

妙正神遺跡 平成11年9月、有限会社立建商事から、建築残土による盛土工事のため、照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は山林で、遺物散布状況を観察できる地点は無かったが、中近世と考えられる塚を数基確認することができた。周知の遺跡の範囲内であることから、その他にも遺構が検出される可能性があると考えられた。このため、照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、9月に「土木工事の届」が提出され、伐採等の準備が整った10月26日に調査を開始した。

沖塚遺跡b地点 平成12年1月、萩原昇氏から宅地分譲のため照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。現況は畑と資材置場になっていた。遺物散布は観察されなかったが、周知の遺跡の範囲内であり、周辺の過去の確認調査及び確認本調査の実績から遺構が検出される可能性があると考えられた。このため、照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、速やかに「土木工事の届」が提出され、資材撤去等の準備の整った1月31日に調査を開始した。

高津新田遺跡b地点 平成12年2月、大和ハウス工業株式会社から宅地造成のため、照会が提出された。これを受け現地踏査を実施した。照会地は、周知の遺跡の範囲内であり、現状において野馬土手を確認することもできた。現況は畑及び荒蕪地で、北側へ緩やかに下る斜面地であった。遺物は泥面子や陶器片が多量に確認できた。縄文土器は小片がごく少量散布していたのみであるが、隣接地において平成4年度に縄文時代早期の竪穴住居跡を検出しているため、本照会地においても同様の遺構が検出される可能性があると考えられた。このため照会地全域について確認調査が必要と判断し、その旨回答した。この回答に沿って事業者と協議した結果、3月に「土木工事の届」が提出され、農作物の撤去等の準備の整った3月14日に調査を開始した。

八千代都市計画基本図



第1図 市内遺跡位置図 (1 : 50,000)

II 各遺跡の概要

1. 真木野向山遺跡 a 地点

遺跡の立地と概要

真木野向山遺跡は市域の北部、神崎川の南岸に位置する。神崎川の低地から西南方向に入る支谷に面して立地している。この区域は段丘地形となっており、標高の低い方が千葉段丘面、高い方が下総下位面と呼ばれ、遺跡はこの両面を範囲とする。今回の調査区は、島田台霊園の敷地内であり、下総下位面の標高約22.1mのところにあたる。同敷地内では、昭和60年度に墓地造成に先行して確認調査・本調査が行われているので、同敷地内を a 地点とする。この時の調査では、縄文時代中期加曾利E3・E4式期の住居跡3軒等が検出された。

a 地点の北側一帯の、千葉段丘面から下総下位面の一部にわたる区域 (b 地点) については、住宅地造成に先行して昭和62年度から平成2年度の期間に数回にわたり発掘調査した。特に千葉段丘面において縄文時代早期及び古墳時代前期を中心とした遺跡が明らかとなった。また、本遺跡の東隣には、千葉段丘面において古墳時代前期の住居跡が229軒検出された佐山台遺跡が存在する。

現地は前述したように霊園内であり、大半は起伏のない平坦な荒蕪地である。東隣には雑木林が残されている。地表面観察では、所々で縄文土器片や土師器片など合計92点を採集できた。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、100m×100mの大グリッドを設定し、その中に10m×10mの中グリッドを、さらにその中に5m×5mの小グリッドを設定した。この区画をもとに2m×4mのトレンチを10m間隔で設定し、必要に応じて拡張を行った。約620㎡を掘削し、遺構検出に努めた。

調査期間は、平成11年4月19日～同年5月7日である。検出された遺構がピットのみであったので、これらの本調査も併せて行った。19日～20日トレンチ設定、20日一部人力で掘削、21日～22日重機表土剥ぎ及び遺構検出作業、23日～7日遺構調査及びトレンチ土層調査、30日～7日遺構平面実測、7日器材撤収を行った。

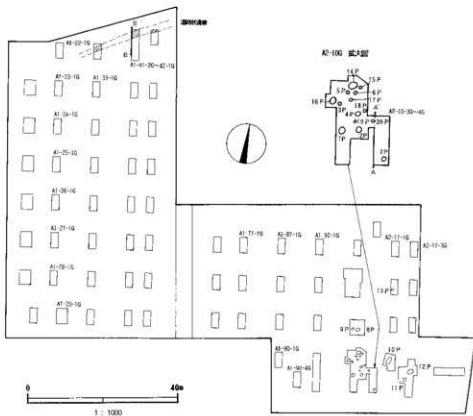
調査の概要

調査区全体が不自然な平坦地であるため、大規模な地形変化が予想されたが、やはり全体にわたって掘削や削平、埋土や盛土が確認された。調査区東端のA2-17-3G西壁の土層では、I層が粘土の混じった埋土で厚さ0.6～0.9mに及ぶ。これは谷の影響で窪んだ地形を埋め立てているためである。IV層ハードローム層の上面は標高22.33m前後である。ここで認められた谷は、北方の神崎川の低地から入る小谷で、真木野向山遺跡と佐山台遺跡とを区分する谷に連なるものである。

縄文中期の遺構・遺物が多量確認されたA2-10-3G～4Gの西壁では、II-3褐色土層に遺物が主体的に



第2図 真木野向山遺跡 a 地点位置図(1:5,000)



第3図 真木野向山遺跡 a 地点遺構検出状況図

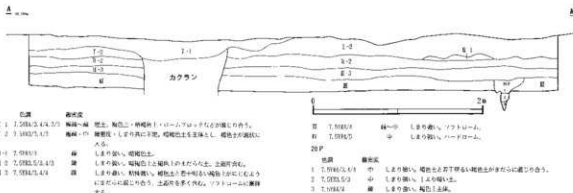
含まれ、Ⅱ-2暗褐色土・褐色土層にも含まれていた。Ⅳハードルーム層の上面は標高約22.61mで、A2-17-3Gに比べると0.28mほど高い。西側の区域では、表土に粘土や山砂の混じった埋土が厚さ0.6～0.9m堆積し、その下は厚さ0.1～0.23mの褐色土を挟みソフトルームに漸移する。掘削された後に埋め立てられたものと思われる。ハードルーム面までの深さは北のほうが深くなっており、全体に北に向かって低くなる地形であったことがわかる。

遺構は、まずA2-10Gを中心にビット20基を検出した。それぞれを1P～20Pとする。ほとんどのビットから縄文土器片が出土した。いずれも縄文時代中期末に属するものであろう。第5・6図及び一覧表を参照されたい。他にA1-31-1G～41-2G～41-4Gに渡って道路状遺構が検出された。轍の跡のような痕跡がある。遺物は、陶器の碎片1点のみが出土した。近世以降のものと思われる。

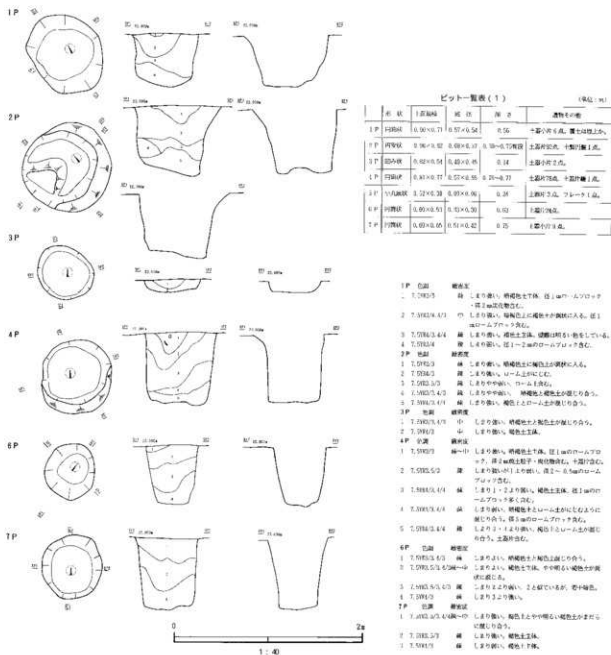
遺物は合計1,704点が出土し、そのうち約97%に当たる1,652点はA2-10Gとその周辺で出土し、それらのうち99%は縄文時代中期末の土器片であった。第8・9図に主な遺物を掲載した。中期末の加曾利E4式を主体とし、他に加曾利E3式、早期茅山式、後期称名寺式・加曾利B式を確認した。土製品は、土器片錘9点・土製円盤5点である。石器はチャート製石鏃・割れ口に擦った痕跡のある叩き石、他に頁岩のフレークが出土した。

調査のまとめ

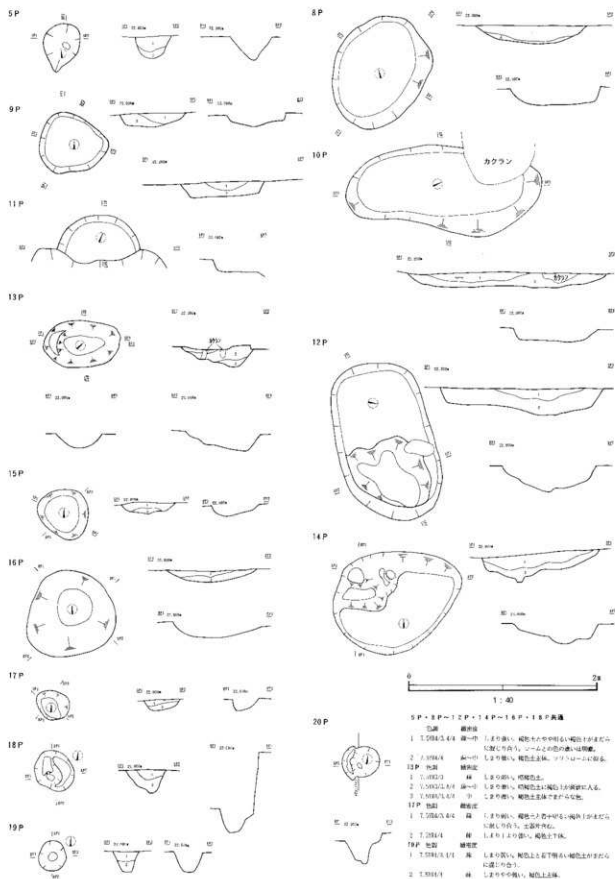
今回の調査により、ビット群と土器片、土器片錘、土製円盤、石鏃などからなる、縄文時代中期末の地点が明らかとなった。この地点の北方で昭和60年度に調査された住居跡3軒等も、縄文時代中期末とされている。双方は一連の遺跡と考えてよいであろう。今回の地点の性格については、生活拠点の周辺部の様相として捉えておきたい。



第4図 真木野向山遺跡a地点A2-10-3G - 4G西壁土層断面, 20P土層断面



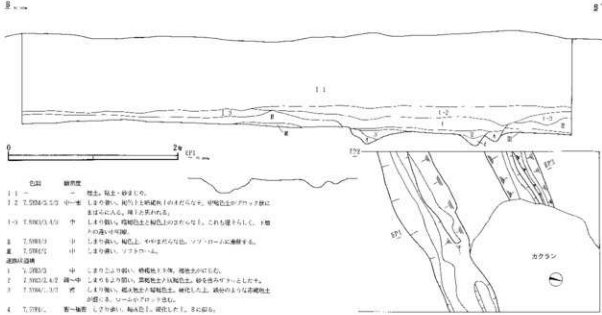
第5図 真木野向山遺跡a地点遺構実測図 (1)



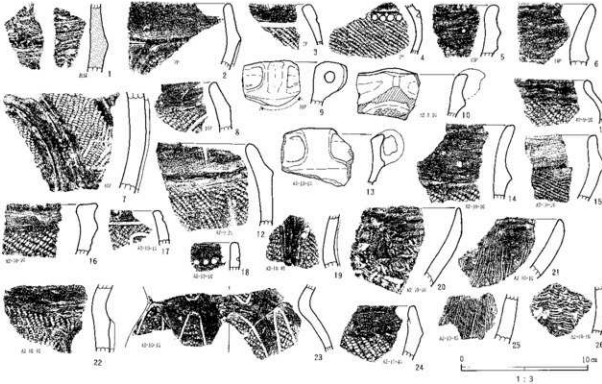
第6図 真木野向山遺跡 a地点遺構実測図(2)

ビット一覧表(2)

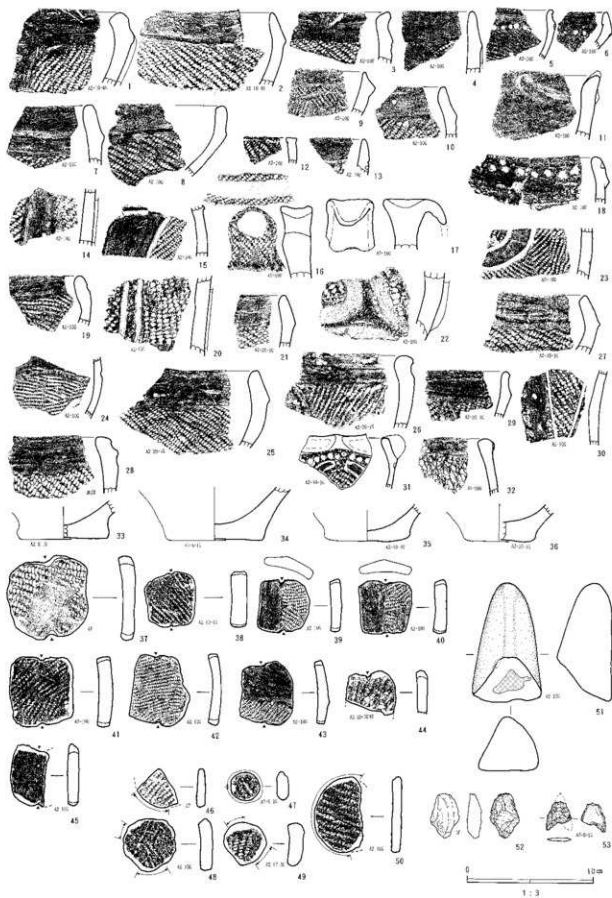
層	層厚	土質	高さ	植物その他	14P	15P	16P	17P	18P	19P	20P
9P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	1.11×0.09	1.27×0.11	0.10×0.20(1)	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
10P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.09	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
11P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.97×0.08	0.80×0.10	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
12P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
13P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
14P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
15P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
16P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
17P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
18P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
19P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10
20P	1.00	砂質土	0.10	植物の葉	0.90×0.08	0.70×0.11	0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10	1.00×0.10



第7図 A1-41-2G ~ 42-1G 西壁土層断面、道路状遺構平面・エレベーション図

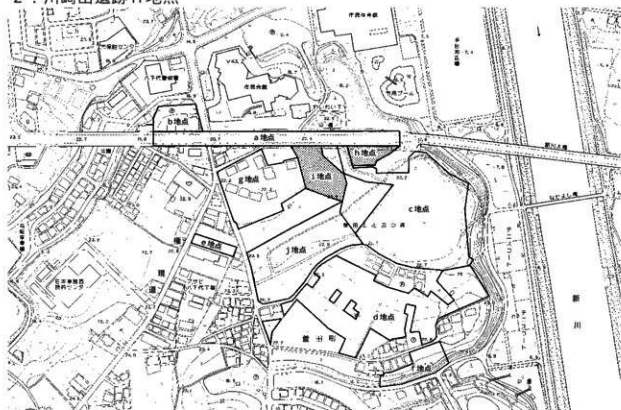


第8図 真木野向山遺跡a地点出土遺物(1)



第9図 真木野向山遺跡a地点出土遺物(2)

2. 川崎山遺跡h地点



第10図 川崎山遺跡h・i地点位置図(1:5,000)

遺跡の立地と概要

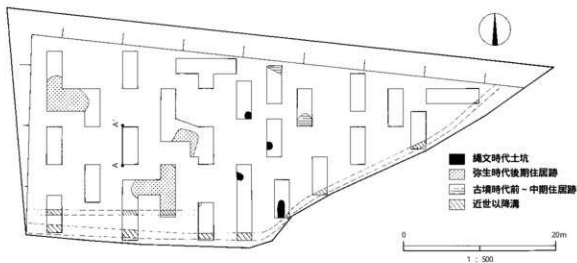
川崎山遺跡は、八千代市南部、新川西岸の台地上に位置している。この台地は南側と北から西側にかけてをそれぞれ新川の低地から入り込む谷によって開析されている。標高は約20～23mを測り、新川の低地との比高差は約13～16mである。

川崎山遺跡周辺は平成8年に開通した東葉高速鉄道の八千代中央駅や村上駅に近いこともあり、近年宅地造成などの開発が盛んな地域である。これらの開発に伴い川崎山遺跡では平成12年3月現在既に10カ所の地点(a～j地点)にて発掘調査が実施されており、旧石器時代から平安時代の多岐に至る遺構・遺物が検出されている。これらの調査の結果から縄文時代の遺構は台地縁辺部から中央平坦部にかけての広範囲に展開し、弥生時代以降の集落は台地縁辺部を中心に展開するという傾向が窺える。また、近世から近代にかけても川崎山遺跡周辺は人々の往来が絶えなかった地域であったようである。川崎山遺跡内には成田街道(現国道296号線)の大和田宿と萱田の飯綱神社(飯綱大権現)を結び権現道が南北に走っており、特に境内で市が開かれる日には多くの人々が列をなしていたということである。

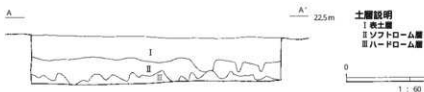
今回の調査区はh地点である。h地点は標高22m前後の台地縁辺部に位置しており、北側と西側が道路建設の際にのり面として削られてしまっている。現況は山林(萱田町市民の森)であった。隣接するa地点においては弥生時代後期～古墳時代中期の住居跡7軒、c地点においては旧石器時代遺物出土地点1カ所、縄文時代落と穴状土坑12基、弥生時代後期～奈良平安時代の住居跡52軒が検出されており、h地点においても該期の遺構の所在が想定された。

調査の方法と経過

調査は樹木の伐採が終了後、任意に10m方眼を組んだのち、これに平行する形で2m×5mのトレンチを設定して実施した。また、検出状況を確認しながら、適宜、トレンチの増設、拡張を行い遺構の捕



第11図 川崎山遺跡h地点遺構検出状況図



第12図 川崎山遺跡h地点土層断面図

掘に努めた。

調査期間は平成11年4月23～30日で、23日器材搬入、方眼杭及びトレンチ設定、26・27日重機による表土除去作業、遺構検出作業、28日実測・撮影等記録作業、30日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は、Ⅰ表土層、Ⅱソフトローム層、Ⅲハードローム層となっており、遺構検出作業はⅡソフトローム層の上面で行った。

調査の結果、当初の想定通り、縄文時代から古墳時代にかけての遺構を検出することができた。縄文時代土坑4基、弥生時代後期住居跡3軒、古墳時代前～中期住居跡2軒である。また、時期不明の溝2条も検出された。遺物は縄文土器・弥生土器・古墳時代土器の細片が数片、礫1点、寛永通宝1点、泥面子2点が出土している。

調査のまとめ

今回の調査では、縄文時代から古墳時代にかけての遺構を検出することができた。縄文時代については土坑4基が検出されたが、隣接するc地点の調査結果から落とし穴状土坑の可能性が考えられる。弥生時代～古墳時代については住居跡が5軒検出されており、前述したような集落展開の傾向をより明確にしたといえる。また、その他の遺構としては時期不明の溝が2条検出されている。南側の溝は土地の境界に沿って検出されていることから、近世以降の境界溝の類と思われる。この溝は隣接するa地点やc地点においてその延長が検出されていないことから、おそらく調査区内にて終息しているものと思われる。また、掘り込みが浅いため調査区内で消失してしまっているが、北側の溝も南側の溝と平行して検出されていることから同じ性格の溝と思われる。

今後h地点については、引き続き本調査を行う予定であるため、遺構の詳細については本調査の結果を受けて分析・報告していきたい。

3. 浅間内遺跡（第4次確認調査）

遺跡の立地と概要

浅間内遺跡は、市域の南部、新川の東岸に位置する。北を新川の低地から東に入る小谷に、南を入り江状の辺田前・沖塚前低地に画された台地上に立地する。この台地上西端には浅間神社が鎮座しており、これが地名の由来となっている。今回の調査区はこの浅間神社の周辺であり、標高25m前後のところにあたる。隣接地では、平成6～7年度に確認調査・本調査が行われ、旧石器～中世に至る遺跡が検出されている。浅間神社内では、花瓶が彫られた断碑が1点採集されている。小谷を隔てた北側には中世の正覚院館跡が存在する。

現地は台地上のわずかな平坦面と斜面地である。山林であるため地表面の観察では遺物を確認することはできなかった。神社祠の北東に当たる所には径3mほどの窪みが存在した。神社に関連するものか、あるいは根を抜いた跡かと思われた。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、幅1.5mのトレンチを設定し、それぞれを1T～12Tとした。約150㎡を掘削し、遺構検出に努めた。

調査期間は、平成11年5月28日～同年6月3日である。28日重機表土剥ぎ及び遺構検出作業、31日～1日遺構検出作業、1日～2日遺構調査及びトレンチ土層調査、3日調査区平面実測・遺物洗浄・器材撤収を行った。

調査の概要

東側の複合遺跡の範囲が、どの程度この区域に及んでいるかが調査の要点であった。

土層は全般に埋土や攪乱が多く、良好な堆積は見られなかった。台地上平坦面の7T南壁の土層を図示した。

遺構としては、7T・11Tからピットが5基検出された。台地上平坦面から斜面にかけて分布し、いずれも小規模なものである。7Tからは縄文土器の小片が3点、古墳時代前期などの土師器片が2点出土したが、11Tには遺物は無かった。遺物は少ないが覆土の状態などから縄文時代の遺構と判断した。

3T・10Tからは住居跡規模と考えられる遺構が2基検出された。3Tの遺構では床を検出した。遺物は縄文時代早期燃系文の土器片1点、弥生時代後期土器片2点、古墳時代前期の土師器片1点などが出土した。10Tの遺構は斜面を離壇状に削ったもので、焼土が少量伴っている。遺物は古墳時代前期の土師器片が2点出土した。2基とも遺物は少ないが古墳時代前期に属すると判断した。

地表面観察で見られた窪みは9Tで掘削したが、覆土がやわらかい土で、寛永通宝が出土しており近世以降の土坑と判断した。他に1T～3T～4Tにかけて溝を検出した。これは近現代のものと思われる。

遺物は総点数30点で、縄文時代早期燃系文の土器片、弥生時代後期土器片、古墳時代前期・後期土師器片、須恵器片、陶器片、すり鉢片（割れ口が擦られている。砥石として再利用か）、寛永通宝など



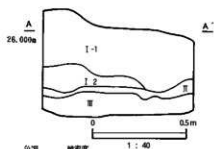
第13図 浅間内遺跡位置図（1：5,000）

である。ほぼ東側の状況を反映した時代構成である。

神社境内は、斜面を雑壇状に削ってできており、ロームが露出している。現状のままですべての遺構等の検出を試みたが、土器破片1点と近現代の土製品破片2点を得られたのみである。

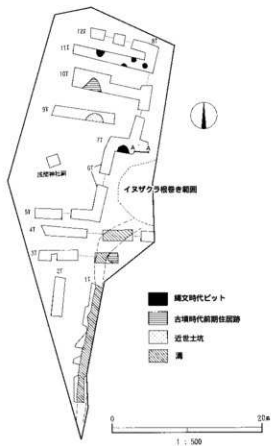
調査のまとめ

密度は低かったが、遺構・遺物を検出することができた。本調査対象範囲は、各遺構を含む98㎡である。詳細な分析は本調査後に行いたい。

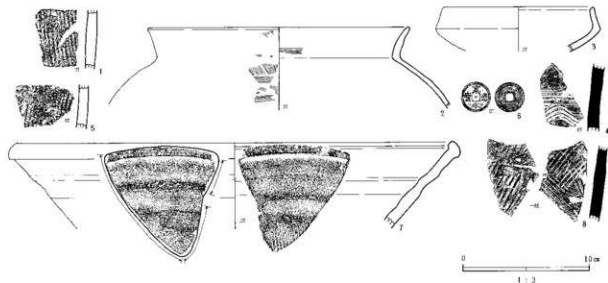


色調	観察度	説明
I-1	7.5184/3	雑壇な褐色土。埋土と区別される。
I-2	7.5184/3	よりほしまっているが、これもやわらかい褐色土。埋土と区別される。
II	7.5184/3.5	しまり強い。ロームに露出する褐色土。
III	7.5184/4	ソフトローム。

第15図 浅間内遺跡7T南壁土層断面図

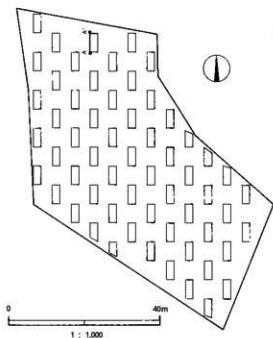


第14図 浅間内遺跡遺構検出状況図

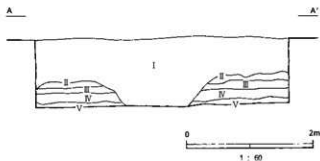


第16図 浅間内遺跡出土遺物

4. 川崎山遺跡 i 地点



第17図 川崎山遺跡 i 地点トレンチ配置図



第18図 川崎山遺跡 i 地点土層断面図

遺跡の立地と概要

本遺跡については、川崎山遺跡 h 地点の頁で記したように、過去の調査において、旧石器時代～平安時代の各時期の遺構・遺物を検出している。遺跡全体の遺構分布は、新川に近い東側の台地縁辺部で各時期の集落等遺構分布が濃く、西側にいくに従って、落とし穴等の遺構が散発的に検出されている。従って、今回調査した西と東の中間地点となる i 地点における遺構分布状況が、東側での集落等遺構展開の限界点となるかどうか焦点が絞られた（第10図）。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に沿って10m間隔に2×5mのトレンチを設定し、適宜その間にトレンチを設け遺構確認を行った。

調査期間は平成11年8月5日～同年8月12日で、8月5日方眼杭及びトレンチ設定、6日～11日重機及び人力によるトレンチ掘り下げと包含層調査、12日基本層序等写真撮影及び実測作業と器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

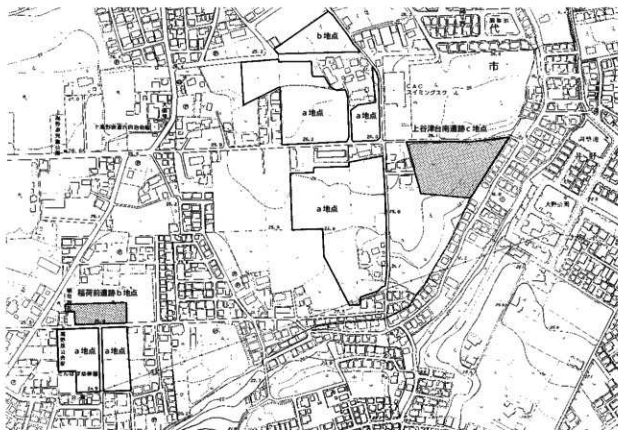
本遺跡の基本層序は、Ⅰ表土ないし盛土、Ⅱ黒色土、Ⅲ褐色土、Ⅳ暗褐色土、Ⅴ暗黄褐色土（ソフトローム漸移層）、Ⅵソフトローム層となっている。

現地はローム土が上面に確認できる状況であり、天地返し或いは盛り土と考えられた。掘り下げの状況から、表土及び部分的にソフトロームまでカクランを受けていることが判った。調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。

調査のまとめ

今回の調査においては、集落等遺構の展開が本地点まで広がっていなかったことが判明した。川崎山遺跡は、確認及び本調査を含め10地点の調査を実施している。今後南側地区の本調査が実施されれば、遺跡としての各時代の景観と消長が明らかになっていくことと思う。

5. 上谷津台南遺跡c地点



第19図 上谷津台南遺跡c地点・稲荷前遺跡b地点位置図(1:5,000)

遺跡の立地と概要

上谷津台南遺跡は、佐倉市との市境を流れる井野川西岸の台地上平坦部に位置する。標高は約24mを測る。現在までに2地点の調査が実施され、落とし穴状遺構を含む4基の土坑等を検出している。詳細については、平成8年度市内遺跡発掘調査報告書を参照されたい。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に沿って10m間隔に2×5mのトレンチを設定し、適宜その間にトレンチを設け遺構確認を行った。

調査期間は平成11年9月1日～同年9月16日で、9月1日～2日方眼杭及びトレンチ設定、3日～13日重機及び人力によるトレンチ掘り下げ及び包含層調査、13日～16日基本層序等写真撮影と実測作業及び下層確認調査を実施し、16日午後器材撤収により調査を終了した。

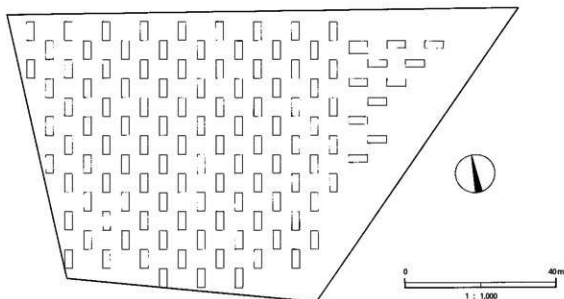
調査の概要

本遺跡の基本層序は、Ⅰ表土、Ⅱ黑色土、Ⅲ褐色土、Ⅳ暗褐色土、Ⅴソフトローム漸移層、Ⅵソフトローム層となっている。遺構確認面はⅣ～Ⅴ層で行った。

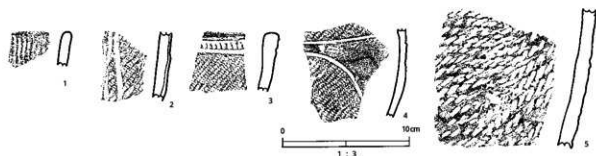
調査の結果、遺構は検出されなかった。遺物は縄文時代早～後期の土器片が少量出土している。

調査のまとめ

今回の調査において、上谷津台南遺跡での遺構分布状況がある程度把握できた。それは台地先端部では遺構は検出されず、台地平坦部のやや奥の地点において落とし穴等の土坑が散在しているということである。井野川水系の最奥部に近いということで遺構密度が低いということであろうか。



第20図 上谷津台南遺跡c地点トレンチ配置図



第21図 上谷津台南遺跡c地点出土遺物

6. 稲荷前遺跡b地点

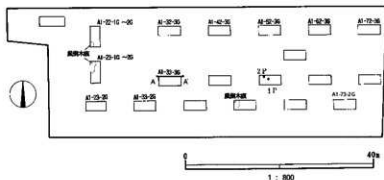
遺跡の立地と概要

稲荷前遺跡は、市域の南東部に位置する。市域の東端である佐倉市との市境は、印旛沼に流れ込む井野川・小竹川の低地がほぼ南北に走っている。遺跡はこの谷の奥部を南に臨む台地上、稲荷神社の周辺の平坦面からゆるやかな南向き斜面にかけて立地している。位置については第19図を参照されたい。

緩斜面に当たるa地点では、平成9年度に宅地造成に先行する確認本調査が行われ、縄文時代早期穴1基、奈良平安時代方形周溝状遺構1基、近世土坑1基が検出された。遺構・遺物とも密度は低かった。今回のb地点は、神社の東に隣接した区域である。ここは埋め立てが行われているため、地表面観察は不可能で遺物は確認できなかったが、隣接地や北東側の畑地で縄文土器の碎片を採集した。

調査の方法と経過

調査区の形状に合わせて、10m×10mのグリッドを設定し、さらにその中に5m×5mの小グリッドを設定した。この区画をもとに2m×4.5mのトレンチを20箇所設定した。約180㎡を掘削し、遺構検出に努めた。



第22図 稲荷前遺跡b地点遺構検出状況図

調査期間は平成11年10月15日～同年10月27日である。検出された遺構がピットのみであったので、これらの本調査も併せて行った。15日草刈り，21日トレンチ設定，22日重機表土剥ぎ及び遺構検出作業，25日～26日遺構調査及びトレンチ土層調査，27日埋め戻しと器材撤収を行った。

調査の概要

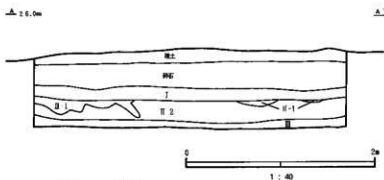
全体的に埋土と砂利・砕石が認められ，その厚さは0.3～0.9mであった。その下に耕作土と思われる褐色土主体の層，さらにその下にはロームに漸移する褐色土が確認された。

遺構はA1-53-3Gで検出された2基の小ピットである。1Pは，検出面の直径が約0.26m，深さが0.24mの尖底ピットである。2Pは，検出面の直径が約0.24m，深さが0.25mの尖底ピットである。ともに覆土の特徴から縄文時代のもつと判断した。

遺物は，A1-73-2Gから出土した黒曜石片1点のみであった。

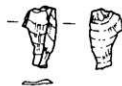
調査のまとめ

今回の調査により，この地点は遺構・遺物とも稀薄であることが確認された。遺跡の主体は別の地点なのであろう。

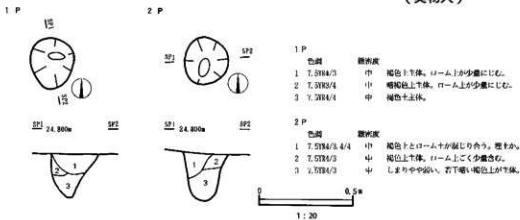


色調	観察度	説明
I 7.59K3/2.4/4	稀	褐色土と種子状の褐色土とが均等に混じり合っている。同化材料を含む。
II-1 7.59K3/2.4/4	稀	褐色土とローム。径1～3cmのプロック状の褐色土を含む。黒土粒子ごく少量含む。上下との層界は明確。
II-2 7.59K4/2.4/4	密	褐色土主体。より鮮やかな褐色土が間状に入る。
III 7.59K4/4	中	ソフトローム。

第23図 A1-33-3G北壁土層断面図



第24図 稲荷前遺跡b地点出土遺物(実物大)



第25図 稲荷前遺跡b地点遺構実測図

7. 妙正神遺跡

遺跡の立地と概要

妙正神遺跡は、八千代市北部，神崎川南岸にいたる谷津に面した台地上平坦部に位置している。標高約22～23mで、水田面との比高差は約11mを測る。本遺跡を含む周辺地域での発掘調査例はない。また、本遺跡内及び周辺には7基の塚が現存し、神久保塚群と呼称される。後述するがほぼ中近世の塚と想定していいようである。平面形はおおむね方形で、規模は大小2タイプある。一辺10～12mで高さ1～1.2m程度のもとの一辺3～5mで高さ0.5～0.7m程度のものであるが、配置等の規格性は見られない。

調査の方法と経過

調査区内は下草刈りのみの未伐採の状態だったため、立木を避けてトレンチを設定し遺構確認を行った。また同時に、調査区内に遺存する塚状遺構の性格を把握するため、遺構に接してトレンチの設定を考慮した。

調査期間は平成11年10月26日～同年11月12日で、10月26・29日塚状遺構地形測量，11月2日～8日重機によるトレンチ掘り下げと遺構確認作業，9日～11日落ち込み状遺構精査及び実測作業，12日写真撮影，器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序はⅠ表土，Ⅱ黒色土，Ⅲ暗褐色土，Ⅳソフトロームとなっている。

調査の結果，弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡2軒，周溝墓と想定される溝状遺構2基，中近世の塚4基を検出した。弥生時代の住居跡は隅丸方形ないし長方形のプランで一辺4.6m程度の規模をもつ。周溝墓は東西に近接して位置する。東側の周溝墓は幅0.7～0.9mで深さ25cmである。溝覆土中より図示した壺が出土している。西側の周溝墓は幅1.3～1.5mで深さ40cmである。ここからの遺物の出土はない。塚は当初古墳としての性格も考慮し，塚に接してトレンチを設定した。その結果，周溝等の施設もなく墳丘封土としての締めまり具合も見られないことから，中近世の塚として想定した。

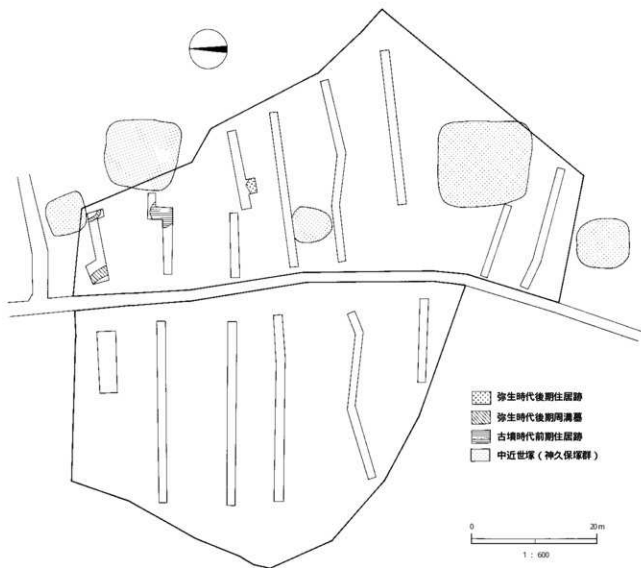
遺物は縄文時代中期土器片少量と，周溝墓に伴うと想定される弥生時代後期末期の壺が出土した。壺は二重口縁で帯状に付加条文を施文し，やや下膨れの胴部の上半に結節の付加条文を3段施す。底部は平底でほぼ遺存している。外面全体に赤彩される。

まとめ

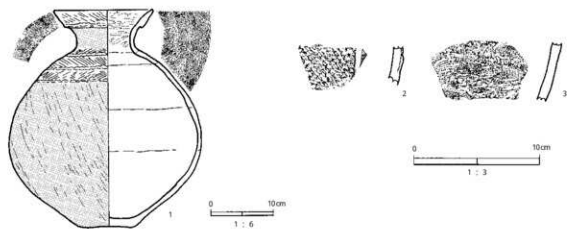
今回の調査において，本遺跡の台地縁辺部の遺跡展開の一端にふれることができた。縄文時代の遺構は把握できなかったが，弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡及び周溝墓が展開し，時を隔て中近世の塚に至る訳である。なお北側の畑では，縄文時代の磨石や磨製石斧等を採集しており当該時期の遺構も少なからず展開していることと思う。



第26図 妙正神遺跡位置図 (1:5,000)



第27図 妙正神遺跡遺構検出状況図



第28図 妙正神遺跡出土遺物

8. 沖塚遺跡b地点

遺跡の立地と概要

沖塚遺跡は、八千代市南部，新川東岸の入り江状の低地に臨む台地上に位置している。標高は約20～25mを測り，低地との比高差は約10～18mである。

沖塚遺跡ではこれまでに2回の調査が行われている。平成2年度と平成4年度に(財)千葉県文化財センターによって行われた東葉高速鉄道の軌道部分の調査と，平成5年度に土地区画整理に先行して八千代市遺跡調査会によって行われたa地点の調査である。東葉高速鉄道の軌道部分の調査においては，旧石器時代遺物集中地点17ヵ所，縄文時代落とし穴状土坑1基，古墳時代初頭鍛冶工房跡1軒，平安時代住居跡1軒等が検出されており，隣接するa地点の調査においては旧石器時代遺物集中地点1ヵ所，縄文時代早～後期炉穴1基，落とし穴状土坑9基，土坑82基，奈良平安時代方形周溝状遺構1基，近世塚2基，時期不明炭焼窯1基等が検出されている。

今回の調査区はb地点である。b地点は標高25m前後の台地中央平坦部に位置しており，現況は畑地と資材置場である。調査区はa地点に隣接しているものの，隣接部周辺においては遺構は検出されておらず，現況においても遺物の散布は認められなかった。そのため，b地点における遺構の分布は非常に稀薄であると想定された。

調査の方法と経過

調査は農作物と資材を避けて，幅2mのトレンチを設定して実施した。

調査期間は平成12年1月31日～2月4日で，1月31日器材搬入，2月1日トレンチ設定，2日重機による表土除去作業，遺構検出作業，3日実測・撮影等記録作業，トレンチ埋め戻し作業，4日器材撤収により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は，Ⅰ耕作土層，Ⅰ'旧耕作土層，Ⅱ暗褐色土層，Ⅲソフトローム漸移層，Ⅳソフトローム層，Ⅴハードローム層となっており，遺構検出作業はⅥソフトローム層の上で行った。しかし，基本層序が確認できたのは調査区の東半部(道路側)のみであり，西半部はⅠ耕作土層下に1m以上の厚さで廃土が捨てられていたため，遺構検出作業は行うことができなかった。地元の人の話では，調査区周辺は表土からハードローム層まで1m以上も削土されて，廃土が捨てられているということであった。

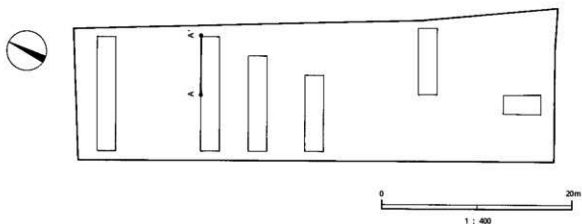
調査の結果，遺構・遺物は検出されなかった。

調査のまとめ

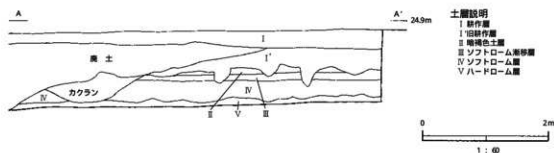
今回の調査では，遺構・遺物は検出することができなかった。前2回の調査においても遺構が検出さ



第29図 沖塚遺跡b地点位置図(1:5,000)



第30図 沖塚遺跡b地点トレンチ配置図



第31図 沖塚遺跡b地点土層断面図

れたのは台地縁辺部及び縁辺部に近い平坦部であり、台地中央平坦部での遺構の検出はほとんどなかった。調査前の想定通り、台地中央平坦部に位置する調査区周辺は遺構の分布が非常に稀薄であったといえる。

9. 高津新田遺跡b地点

遺跡の立地と概要

高津新田遺跡は、八千代市西部の千葉市との市境、旧芦太川の西岸に位置している。芦太川から西に入り込む小規模な谷とこの谷を囲む台地上から台地斜面にかけてが遺跡の範囲である。また、南側の市境の道路沿いには、江戸時代に野馬土手が造られている。この野馬土手は小金下野牧に属する二重土手の野馬土手で、南の千葉市側が牧の内、北の八千代市側が牧の外であった。

これまでに高津新田遺跡では、平成4年度にa地点の調査が行われ、縄文時代早期住居跡1軒と野馬土手・野馬堀が検出され



第32図 高津新田遺跡b地点位置図(1:5,000)

ている。a地点に隣接した今回の調査区はb地点となる。b地点は旧芦太川から西に入り込む小規模な谷の南側に位置し、台地縁辺部からその北側の緩斜面そして谷底までが調査区である。b地点の標高は約18～23mを測り、現況は市境の道路沿いの台地縁辺部が荒蕪地、緩斜面から谷底にかけてが畑地となっている。畑地は荒蕪地よりも一段低くなっていることから、表土を削って畑地としたと思われる。また、道路沿いの荒蕪地にはa地点で調査された野馬土手の延長が確認されており、畑地には泥面子や陶磁器片などの近世・近代遺物の散布が認められる。

調査の方法と経過

調査は調査区の形状に合わせて任意に10m方眼を組んだのち、これに平行する形で2m×4mのトレンチを設定して実施した。また、検出状況を確認しながら、適宜トレンチの増設、拡張を行い遺構の捕捉に努めた。野馬土手については、現況測量を行ったのち、3m×17mのトレンチを土手に直交する形で設定して実施した。また、野馬堀の検出後は、掘削調査及び断面調査を行った。

調査期間は平成12年3月14日～3月30日で、3月14日器材搬入、3月15日方眼杭及びトレンチ設定、15～21日人力による包含層確認掘削作業、野馬土手測量作業、22・23日重機による表土除去作業、遺構検出作業、野馬堀掘削作業、24～28日実測・撮影等記録作業、29日器材撤収、30日重機によるトレンチ埋め戻し作業により調査を終了した。

調査の概要

調査区の基本層序は、荒蕪地がⅠ表土層、Ⅲ黒色土層、Ⅳ暗褐色土層、Ⅴソフトローム漸移層、Ⅵソフトローム層、Ⅶハードローム層、畑地がⅡ耕作土層、Ⅱ'旧耕作土層、Ⅵソフトローム層、Ⅶハードローム層となっており、基本的に遺構検出作業はⅥソフトローム層の上面で行った。

調査の結果、野馬土手1条とこれに平行して野馬堀2条、溝1条を検出することができた。遺物は近世・近代の泥面子及び陶磁器片が多量に出土している。しかし、野馬土手・野馬堀からの出土は少なく、多くが畑地からの表探遺物である。

高津新田遺跡における野馬土手は二重土手であった。現況で確認できたのは牧の内側の土手のみであるが、削土等により大きく改変されており、旧状は留めてはいない。現況での高さ約0.2～0.9mである。また、牧の外側の土手は1号堀と2号堀の間にあったが、調査時には既に削平されてしまっていた。

1号堀は、外側の土手の北側から検出された。造り替えが行われているため、2条の堀となっており、調査区東端において緩やかに南に曲がっている。

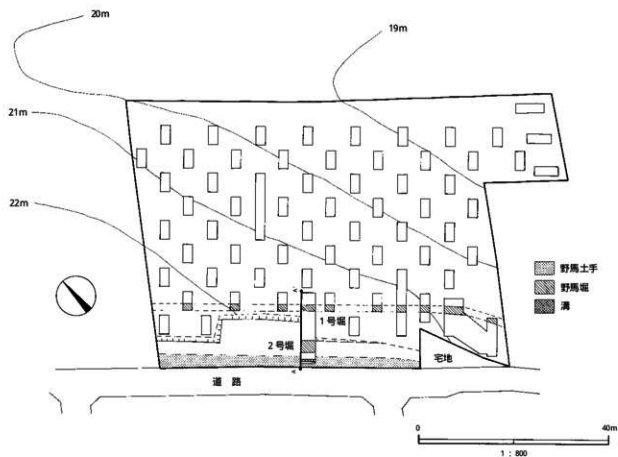
2号堀は、外と内の土手の間から検出された。1号堀よりも幅が広く、深い堀である。調査区の東端において検出されていないことから、道路沿いの三角の宅地付近で1号堀と同様に緩やかに南に曲がっているものと思われる。

溝は、内側の土手の下から検出された。トレンチの断面から判断すると、改変を受けた土手の上から掘られた後世の溝と思われる。境界の溝であろうか。しかし、遺物の出土がなく、覆土がほとんど表土化してしまっているため、詳細は不明である。現段階では時期不明の溝としたい。

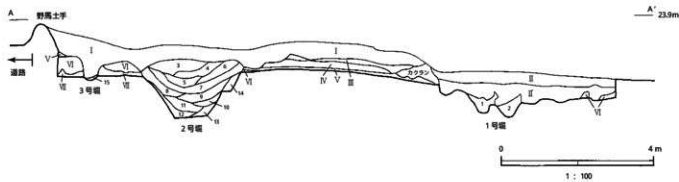
調査のまとめ

調査区の南約100mには旧芦太川の源流である泉上池があった。この池は野馬池とも呼ばれ、野馬の水呑場があったそうである。今回検出された野馬土手・野馬堀は西から千葉市との市境の道路に沿って延び、調査区道路沿いの三角の宅地付近で南に曲がり、旧芦太川に沿って台地縁辺部を水呑場の方向に延びていたと思われる。

今後野馬土手・野馬堀については引き続いて本調査を行う予定であるため、詳細については本調査の結果を受けて分析・報告していきたい。



第33図 高津新田遺跡b地点遺構検出状況図



土層説明

- 色 調
- I 75Y R3Q 表土層
 - II 75Y R2D 砂状土層
 - III 75Y R2B 団粒状土層
 - IV 75Y R2T 紫色土層
 - V 75Y R3A 暗褐色土層
 - VI 75Y R4H ソフトローム層
 - VII 75Y R45 ソフトローム層
 - VIII 75Y R46 ハードローム層

- 色 調
- 1 75Y R4R しまりなし、ローム粒を多量含む。径20mmのロームブロックを少量含む。
 - 2 75Y R4R 基本的に1層に類似するが、1層よりややロームブロックが少ない。
 - 3 75Y R3D しまりなし、ローム粒を多量含む。
 - 4 75Y R3Q しまりややあり、ローム粒を多量含む。
 - 5 75Y R3Q しまりややあり、ローム粒を少量含む。
 - 6 75Y R3A しまりややあり、ローム粒を多量含む。径20mmのロームブロックを少量含む。
 - 7 75Y R3D しまりややあり、ローム粒を多量含む。径10mmのロームブロックを少量含む。
 - 8 75Y R3Q しまりややあり、ローム粒を少量含む。
 - 9 75Y R3T しまり少しあり、ローム粒を少量含む。
 - 10 75Y R3T しまり少しあり、ローム粒を少量含む。
 - 11 75Y R3Q しまりあり、ローム粒を少量含む。
 - 12 75Y R3A しまりあり、暗褐色土ロームが混じり合った土。
 - 13 75Y R3D しまりあり、ローム粒を多量含む。
 - 14 75Y R3D しまり少しあり、ローム粒を多量含む。
 - 15 75Y R3T しまりややあり、ローム粒を少量含む。

第34図 高津新田遺跡b地点野馬土手トレンチ土層断面図

図版1 真木野向山遺跡a地点 その1



(1) 調査前風景



(2) 調査前風景



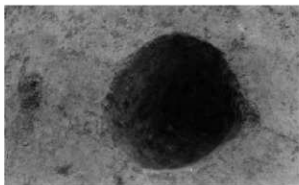
(3) 調査状況



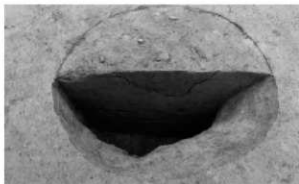
(4) 調査状況



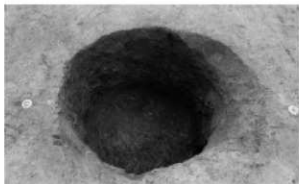
(5) A2-10-3G-4G西壁土層断面



(6) 1P完掘状況

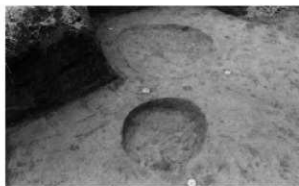


(7) 2P土層断面



(8) 2P完掘状況

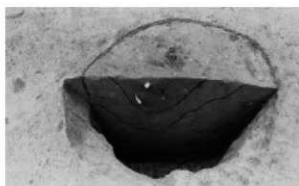
図版2 真木野向山遺跡 a地点 その2



(1) 3 P(手前)・16 P完掘状況



(2) 4 P遺物出土状況



(3) 4 P土層断面



(4) 4 P完掘状況



(5) 8 P(右)・9 P完掘状況



(6) 11 P(手前)・12 P完掘状況

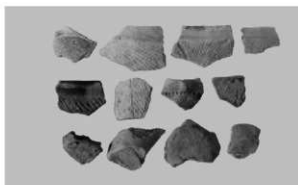


(7) A2-10G完掘状況



(8) 道路状遺構土層断面

図版3 (1) 真木野向山遺跡 a地点 その3・(2)～(5) 川崎山遺跡 h地点



(1) 出土遺物



(2) 土層断面



(3) 調査風景



(4) 遺構検出状況



(5) 遺構検出状況

図版4 (1)～(5) 浅間内遺跡・(6)～(7) 川崎山遺跡 i 地点



(1) 調査前風景



(2) 調査状況



(3) 遺構検出状況



(4) 遺構検出状況



(5) 出土遺物



(6) 調査前風景



(7) 調査状況



(8) 調査状況

図版5 (1)～(4)上谷津台南遺跡c地点・(5)～(8)稲荷前遺跡b地点



(1) 調査前風景



(2) 調査状況



(3) 調査状況



(4) 出土遺物



(5) 調査前風景



(6) 調査状況



(7) A1-33-3G北壁土層断面



(8) 1P・2P完掘状況

図版6 (1)～(4) 妙正神遺跡・(5)～(8) 沖塚遺跡b地点



(1) 塚



(2) 周溝墓内遺物出土状況



(3) 遺構検出状況



(4) 出土遺物



(5) 調査前風景



(6) 調査風景



(7) 調査風景



(8) 土層断面

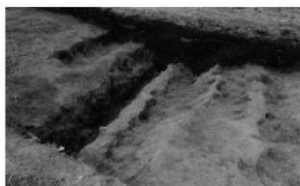
図版7 (1)～(6) 高津新田遺跡b地点



(1) 調査区全景



(2) 野馬土手全景



(3) 1号堀



(4) 2号堀



(5) 溝



(6) 調査風景

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよししないいせきはくつちょうさほうこくしょ へいせい12ねんど							
書 名	千葉県八千代市内遺跡発掘調査報告書 平成12年度							
編 著 者 名	宮澤久史・常松成人・武藤健一・森竜哉							
編 集 機 関	八千代市教育委員会							
所 在 地	〒276-0045 千葉県八千代市大和田138-2 TEL.047(483)1151							
発行年月日	西暦 2000年9月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
眞木野向山遺跡 a地点	八千代市眞木野向山 字東山久保976-4ほか	12221	23	35度 46分 4秒	140度 6分 25秒	19990419 ～ 19990507	620 / 6,112 本調査110	墓地造成
川崎山遺跡 h地点	八千代市萱田字中台 2292-1	12221	241	35度 43分 12秒	140度 6分 50秒	19990423 ～ 19990430	319 / 1,498.04	店舗建設
浅間内遺跡	八千代市浅間内 2819-1ほか	12221	204	35度 43分 27秒	140度 7分 5秒	19990528 ～ 19990603	150 / 570	土地区画 整理
川崎山遺跡 i地点	八千代市萱田町字川崎山 741-1の一部	12221	241	35度 43分 11秒	140度 6分 47秒	19990805 ～ 19990812	480 / 2,982.31	畑地造成
上谷津台南遺跡 c地点	八千代市上高野字上谷津 台1053-1, 1056, 1057	12221	229	35度 43分 14秒	140度 8分 38秒	19990901 ～ 19990916	上層936 下層14.4 / 6,035	宅地造成
福向前遺跡 b地点	八千代市上高野字上谷津 台1126-1の一部	12221	232	35度 43分 7秒	140度 8分 19秒	19991015 ～ 19991027	180 / 1,814.59 本調査4	共同住宅 建設
妙正神遺跡	八千代市神久保字 北之谷津44ほか	12221	5	35度 46分 21秒	140度 5分 50秒	19991026 ～ 19991112	433 / 4,341.08	残土埋め 立て
沖塚遺跡b地点	八千代市村上字下市場台 北側2215-8ほか	12221	215	35度 42分 57秒	140度 7分 34秒	20000131 ～ 20000204	106 / 748.84	宅地造成
高津新田遺跡 b地点	八千代市八千代台南 2丁目1-2, 4-1	12221	250	35度 41分 22秒	140度 5分 47秒	20000315 ～ 20000330	690 / 4,336	宅地造成